

三里塚と中国に生きる

三里塚農民運動活動家 加瀬 勉

記憶の底に焼きついている優越感

私のおさない記憶の底に焼きついている中国についての印象といえば、日本が神の国・ひのものと国として真赤にぬられ教室のすみにはあってあった一枚の世界地図であった。朝鮮・台湾はもちろんのこと、広大な中国大陆と、そこからつらなるインドシナ半島から西ニューギニアに至る南方の国々と島々の日本の占領した領土としてのうす赤い色であった。

その広大な中国領土の上でところせましと縦横無尽に活躍する「皇軍」の勇姿と、南京の城壁で天にとどろけとばかり万才を叫ぶ「神兵」、広東省の街中を馬にまたがって前進する大将と兵士、上海に上陸した陸戦隊の純白のキャハンが私の脳裏の深部に焼きついて離れない。伊藤深水の戦争画にみる、敵を圧してゆく戦車の重圧、砲火のすさまじさ、その先で青い軍服をきて逃げまどうひくつな中国の軍隊の姿、これらの写真や本をいつどこでどのようなときに見たり読んだりしたのかたしかな記憶はない。

狭い国に住んでいる者が大きい領土を持つことは、貧乏人がいつも地主やものもちにいだきつづけている卑屈感を満足させるようなものであった。他民族を徹底的にやっつけうちのめすことは、喧嘩で相手をやっけて勝ち誇る感情に似て、興奮と恍惚・解放感と優越感のこころよさに全身が酔いしびれてゆくのを覚えている。

また部落に死人ができると、病人がつかっていた布団や着物など、あるいは鉄くず、廃品のたぐ

いをよく中国人や朝鮮人が買いにきた。私と仲間たちは「ボロカイ」、「ボロカイ」と子供のきいろい^{くも}ばしと声で唱和して馬鹿にしたものであった。そうしていたずらがすぎると、両親や大人はかならず「ボロカイ」に連れていってもらうぞと私をしかったものだった。

この中国の人や朝鮮の人が人買にみえて、死人のつかったボロキレのように本当につれ去られてしまうのではないかという恐怖心をもったことを覚えている。

この天皇制支配のなかのこの優越感は、「空だ男の征くところ」という目的意識を私のなかにしだいに作りあげていったのである。

強制労働の日々と優越感の崩壊

この侵略をやり 侵略をささえる優越感は学校生活のなかで日々に崩壊してゆく毎日であった。首都防衛、九十九里防衛と称して、学校は軍隊によって占拠され、軍馬用飼料の草刈、男手のない家の麦ふみ、芋ほりの農作業、軍服をつくるための桑の木の皮むき、飛行機をとばすための松根油とり、軍隊のつかう防空ごう掘りの砂だし、井戸掘りの縄ひき等等、毎日、連日、強制労働に狩りだされていった。

この強制労働がもとで過労のため私のとなりの友達が死んだ。その両親と親類の者がうす暗い部屋で大声で泣き悲しむ姿が私の心の底に焼印でおしたようにいまだに痛みをもって残っている。私は小学校に入るときから級長を任命されていたので仲間の先頭にたって何事につけても集団として

良い成績をあげなければならない立場においやられていたのである。その努力の結果が友達の死をもたらしただと思ったのである。

このことがあってから、私は決して桑の皮むきや、軍馬の草刈に良い成績をあげようとしなかったし、仲間にも勧めなかった。その代償は先生からすぐやってきた。朝礼で成績不良として、全校生徒の前で体罰を受けることであった。私の頭には二針ほどの傷が残っている。その傷の痛さに耐え寒風の突き刺す校庭で泣くのは男の恥だから、男として仲間から笑われ相手にされないから、全身を一つの魂にして頑張ってたっていた。

私の村のまわりには、香取飛行場、八街飛行場、栗山飛行場があって、連日アメリカの飛行機に爆撃を受け焼夷弾の雨がふりそそいだ。父は牛車をひいて毎日、その補修のため強制労働に狩り出されていった。その父も食糧とナベとカマと鉄くずといっしょに兵隊にとられていった。千人針を縫う毎日がつとき、一家は食事も喉を通らない。親類の人や部落の人がいなくなると泣く私や母や兄弟を残して父は兵隊に出ていった。

そうして栄養失調の父が兵隊から帰ってきて、大きいカマに湯を煮立て、シラミ退治に下着を煮て、トウガラシをぶら下げたような電燈の下で一家そろってシラミ退治をした。ひさしぶりに私の家にも笑いもどってきた。

私の家は曾祖父の時代から水呑百姓、小作人であった。だから祖父は地主の年貢上げや農繁期の働き手の調達、地主の田圃の水番、等々をやってくらしをたてていた。秋になれば、銀髪頭の地主が護身用のピストルをふところに入れて、かならず私の家にやってきた。

父も母もこの地主の家で奉公人として働いてていっしょになったのである。

地主の年貢とりをやってくらしをたてていた私の家は、よく小作人や農民党？の人が押しかけて

きた。タタミの上に包丁を突き刺して、祖父や父は「年貢を今年のはらわないぞ」、「少しまけろと地主に言え」とおどかされ、強迫されたことがあった。

村では共産党がもうひとつの農協をつくって平和農協と称して部落の大勢の人の支持をえていた。そうして、小作人として地主から借り受けていた田圃が自分の家のもちものになった。

この田圃からとれた米がアメリカ軍のジープや機動隊がとりにくるといので、祖父と父はそれをかくすため、縁の下に穴をほったり、いよいよあぶなくなると真夜中に裏山に隠しにいった。そして、百姓であるが米を食うことが罪悪であるように、家族は米があることなど口にしてはならない、食ったことだまっていって祖父や父にかたく口止めされた。だから穀入れはいつもからにしておいだ。床芋を食い、カボチャを食い、オカズはいなごという毎日がつづいた。

部落で強権発動をくって首をくって死ぬ者が出てきた。アメリカ軍と機動隊に、明日食う米も大豆も持ってゆかれてしまったのを悲観したのであった。

私は本もなく、ノートもなく、エンピツもないので学校にはゆかず級友と村の神社やお寺に山賊のようにたてこもり、山遊びをしては焼芋を食ったり、ゆりの根っこ食ったり、川へ魚をとりにいったり、先生が文句を言うものなら木刀を持って先生の家におしかけたり、そんなことの多い毎日をおくっていた。

あの中国の人をやっつけ、領土を占領した優越感「先生に裏切られた」という感情にかわっての反抗と抵抗であった。自分のこのからだのなかに、学校の教室のなかで勉強したという実感はない。

私と毛沢東思想のめぐりあい

小作人が自分の田圃を持つことができたことは

本当に嬉しいことであった。水呑百姓が自作農になったことで、働く意慾もそれだけ、湧いた。

私が農業に深い自覚をもち責任をもって従事するようになったのは朝鮮戦争が終ったころであった。日本の独占資本がアメリカ帝国主義のもとでさらに私たち農民に支配と収奪を強化したときであった。農地改革によって「田圃が自分のものになった」強権発動で米をとられても、「閭閻の分をよけいといればおんなじだ」という農民の生産意慾、多収増産主義から、「何をつくってももうからない」「つくればつくるほどそんをする」と矛盾が激化するなかで、農民として歟をにぎりしめたのであった。

この農民のかかえている矛盾は篤農主義、技術主義では解決されるものでなかった。また、教養主義や立身出世主義の勉強会でときほぐすことができるものでもなかった。私と町の青年の苦悩はますます深まり広がっていった。

そのときに、私の町に中国から2人の日赤の看護婦が帰ってきた。青雲クラブ、耕地人協会のサークルに属していた私達は、この看護婦さんを座談会によんで新生中国の話を聞かせてもらおうと計画した。彼女たちは、「中国では朝夕一時間ずつ学習をみんなでやっている。その学習はマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の学習であり、その学習は労働者、農民に役立つものである」ということであった。

「よおし、その労働者、農民のためになる勉強をしよう」と私は仲間と決意をかためあった。仲間で手分けして東京の本屋をさがしまわって、「社会科学基礎講座」、毛沢東の「矛盾論」、「実践論」、「湖南省農民運動の視察報告」等をテキストにして、多古町社会科学研究会を生れさせたのである。助言者も指導者もないので、各自が熱心に本を読みあい、個人学習をつづけた。「大衆工作」、このひとつの文字を理解するのに大変であった。私と仲間の生活のなかには、村民とか町民とか国民

とかいう言葉しかなかった。大衆という言葉は何をいっているのか、なにをあらわしているのか、その階級性をつかむのに苦心さんたんするのであった。

もう一度学校に入った気でやりなおそうと、会員70名が声をかけあって真面目につづけ、会員が一人だけしか出席しないときもあったが、そのときは黑板に「私は一人で学習していましたが誰れも来ませんでしたので帰ります。私は一人になってもつづけてゆくつもりです。五十嵐」という伝言がたびたび書かれ、学習会の灯は消してはならぬと努力をかさねあったのである。

この学習会は、次第に行動力を個々につけていった。「偉大なる道」「中国の赤い星」などの本を町の公民館で買ってそろえる運動をおこし、私達仲間が要求するたびに公民館の書棚に中国の本が増えていった。

この社研は他町村の組織(赤土、流想会、草子会)にむすびつき、香取郡青年懇話会(1市10ヶ町村)と発展し、千葉県の青年運動、革新運動の潮流をかたちづけていった。

香取郡の社会教育委員会が佐原市で講演会を開催したことがあった。その一人の講師が中国のことを語った。「中国は自由がなくて、政府に反対するものは広場に集めて機関銃でうち殺してしまう」と発言した。そうしたら、聴衆のなかにまじっていた一人の女性が、「私は中国で生れ、そうして父と母とで中国から帰ってきましたが、そんなことはありませんでした」と発言した。この私を含む社会科学研究会や、香取郡青年懇話会の面々が「この野良、うそつきやがって」と会場の外にたたきだしてしまった。まったく痛快だった。このときから、「赤」という危険信号をわれわれははられることになった。

一方、日々の農業労働のなかで、「つくってももうからない」という矛盾をかかえている私は、生活の不安からじっとしてはいれなかった。普通

苗代から保温苗代へ、郷受請的集団労働から共同防除へ(賃金支払方式)、地主的意識の水利の管理から農民的の管理へと、部落のなかでの旦那政治と対決をしていった。

そのとき村で土地改良がおこなわれて、自作農の持ちものになった田圃が区画整理されることになった。そうしたら、農地改革で全部小作人の田圃になっていたと思っていた田圃が、まだ沢山小作地として残っていた。そうして、土地改良を機会に再び土地取上げや強制的に買わされたり、また地主はその小作人と土地交換して良田を一カ所に集めるとかの問題がでてきた。

私は積極的に仲間とともに、その地主や旦那と対決をし、部落で下積みになっている者の立場をしっかりと守っていった。そうして、24才のときに部落長になり、部落の民主的改革を実行していった。

この部落での土地闘争は、農民の所有している田圃の歴史的意味を私に教え、そうして私はその闘争のなかで再び中国を発見し、この闘争を支えた思想が毛沢東思想(湖南省農民運動視察報告)であったことはきり自覚したのであった。

「穏健で安定した農村社会」をつくったという日本の農地改革は、徹底した農業改革と民主主義の原理に立脚した土地配分をおこなって真に農民を解放することではなかった。敗戦によって崩壊の危機にひんした日本資本主義を救い、アメリカを中心とする自由陣営の一員として日本資本主義を再建することであり、また徹底的な土地改革を要求して立ちあがった農民と労働者がしっかりと手をにぎりあうことをおそれ、アメリカの占領政策としての自作農をつくることに、真のねらいがあったことを知った。

そのために、「共産主義者の政治拠点を覆滅するには土地耕作者の境遇改善が必要」であり、「日本農業をして共産主義に反撥させることを目的とした米国の日本占領政策」であった。そうして

農村は、「共産主義の滲透を許さない金城湯池と化し」「新自作農は共産党の経済と政治理論とに反対する陣営としていちじるしく強化することができた」のであった。

日本の農地改革を国際的な背景からみれば、我が国の敗戦に終った第二次世界大戦は、反植民地・民族解放闘争に転化・発展し、とりわけアジアと東ヨーロッパに数多くの人民民主主義国をうみだし、世界の資本主義は危機を深めていった。この資本主義の危機を救うため、日本の農地改革はアメリカの占領政策として実施され、とりわけ、日本の農地改革と時をおなじくして成立した中華人民共和国に対する反共・反革命の拠点として日本の農地改革が実施されたことを知った。

水呑百姓が田をもつことができて、小作人が自作農になった意味をこのように理解した私は、農地改革と同時に成立した中国の社会主義権力・革命闘争・人民の生活に無関心ではいられなくなってしまうのである。水呑百姓、小作人、その子もっている内なる階級的苦痛 — 歴史的条件のちがいはあるにしろ、共通するものを中国の人々の中に発見するのであった。この目のたしかさと広がりにはまた、部落に村に日本中に私と同じ歴史的条件もって生きぬいてきた農民の発見であり、生活のまわり、身のまわりにそんな痛みや傷あとをもち、現に苦痛に耐えつつ生きている農民の発見でもあった。それは観念ではなくて貧乏人が身につまされた肌をとおしての実感としての受け止め方であり、痛さと喜びなのである。

いま、私が現実にかかえている、「つくってももうからない」というこの矛盾は、この本質は何だろう？ 日々の労働のなかでのこの疑念は心から離れるどころか、ますます、私の心にこびりついてきた。

日本の農地改革が反中国政策として実施され、いままで、朝鮮と中国を侵略するために日本が、侵略の直接的基地としてつかわれ、死の商人として

日本独占資本は復活強化され、日米軍事同盟が結ばれた。この結果、この農民に対する抑圧と搾取を、部落の生産の実践活動を通じて発見したときに、私と中国の人民が共同の運命を持っているものとして、私の内なるなかに、またはるか前方に浮沈するのである。

私の戦争体験の、優越感と、裏切感（自分の持っている田圃の広さと農地改革、朝鮮戦争と日本の侵略基地、現実の農民の苦しみの交錯するなかで、中国人民と私の共通の利益とはいったい何かという厳しい主体が芽えてくるのである。

やがてこの主体は、砂川・勤評・警職法・安保条約反対の諸闘争の歴史的試練を受けることになってゆくのである。中国の延安や湖南省や農民講習所は、私のエネルギーの噴出する源となって、思想の故郷として意識のなかに定着してゆくのである。

中国訪問と空港反対闘争への参加

つくればつくるほど損をする農業を私はやめるわけにはゆかなかった。ここでは借金農業がくりかえされ、水稻以外に黒牛や豚を入れたが赤字は増え、しまいには営農資金が生活費にくわれ、米は予約制となり夏からの青田売り前渡金制度となっていた。

農業をやりたいという私の願いは、日に日に、真綿で首をしめあげられるようになっていった。アメリカから麦と武器が大量に入ってくることによって、私の田から麦が消え、学校にいてる妹が、アメリカの脱脂粉乳を学校給食で飲むようになり、さつまいもはアメリカから輸入されてくるコンスターチやベトナムから入るタピオカ澱粉におされてつくれなくなり、米価は据置きの声がでてきて、「米はゆき先張合がなくなっど」とか、「しかし、いくら政府だからといっても米はおそまつにできぬい」という声が、生活のなか

に充満するようになってきた。

私はそのころから土地改良工事の土方や栗山川の河川工事のモッコかつぎやトロッコ押し、大利根用水の機場のくっさく、そうして出稼人夫として飯場ぐらしの賃労働者として、転々と流転の生活をおくるようになった。大企業の下受請いにくくにも、無権利状態のタコ部屋がそのさきざきでまっていたのである。

夏は裸でトロッコを押し、冬の日はランニング1枚でベルトコンベアに土を盛り、寒風の突き刺す顔をなでると、砂がついていると思えばそれはからだの蕊からふき出た塩であった。労働はつらい厳しいものであった。

日本独占資本の支配と収奪の強化は私を農民として生活することを許してくれなかった。しかし権力者と支配者のつくりだした世論は、労働者の月給が十倍になるぞ、思いきった農業政策（構造改善）やって、農民の生活を労働者と同じように楽にするそうだと、いうことであった。しかし、私の現実の生活は出稼労働者への転落であった。

日本の大企業は、独占資本は、雪だるまのようにまるまると肥りつづけ、朝鮮や中国の領土である台湾に、そうして東南アジアにどんどんと資本を輸出していった。資本と工業製品のみかえりとして、農産物がたくさん日本に入ってきた。そうして資本家どもは、「日本農業に対する提言」なるものの発表し、日本の農民を150万人位にするといった立案と政策を、政府にせまってきた。アメリカの麦と古い兵器でやしなわれてきた自衛隊は核を持つまでになり、アメリカの原潜は横須賀や佐世保にしょっちゅう来るようになった。沖縄からは、連日、ベトナム爆撃の飛行機が飛び立ち、日本はアメリカのベトナム侵略の強固な基地としての役割をはたしていった。

日韓条約が締結され、日米安保体制のもとで、日本の支配層は東南アジア軍事同盟を指向してさかんに策動した。こうしてまわりの情勢が大きく

動くなかで、私は深刻な出稼ぎの体験をした。

川鉄でくっさく掘ってパイルを打ちこむ作業していたが鉄の滑車が落ちてきて、手元として働いていた出稼労働者の胸に当たり、長野の農民が即死するという事件に直面した。検死をまつこの農民の死体は、胸の骨が折れるようにへこみ、こもの上は真赤な血で染っていた。

8人兄妹のなかの男一人、私と同じこの長野の青年の死は、はげしいショックを私に与えた。このことが契機で、闘争おこし、暴力団に強迫されつつ出稼労働者の組織化、「年越そば代よこせ」「正月餅代をよこせ」、「1週間に1回魚の刺身を食わせろ」と要求をかゝげて、闘争をおこすのであった。

こうして働きつづけてゆくなかで、私のとなり村である八街、羽田空港の七倍もある富里に新東京国際空港を建設するという話がおこってきた。そうしてこの飛行場はベトナム侵略の基地につかわれるかも知れないということであった。

この出稼農民の死と八街-富里農民への土地収奪をどう自分が理解すればよいか、ということにつきあたった。

私の訪中はこのときにやってきた。

私は日本各界青年代表として、農民代表として一行15名とともに訪中することになった。まさか自分が直接中国にゆけるとは夢にもおもわなかった。何で自分が訪中できるのか見当もつかなかった。

天安門の前に一人たって、新生中国の話をきいたこと、毛沢東思想をよりどころにして土地闘争をやり農地改革の真意をつかんだこと、六〇年安保前後の諸闘争を一生懸命にたたかったこと、その事実をていねいに、ひとつひとつつみかさねて、いま自分が天安門広場にたっている理由をさがしあてようと自分を律するのだが、なかなか実感として整理できない。

大革命のとき、革命の戦士が反動派に首を切り

落とされた、そのときつかわれた大きいオシギリ、餓死か生か、革命の遂行か放棄か、この選択をせまられたときの「自分の手足で衣食住を豊かにしよう」という目標のものとのかずかずの実践、中国共産党員と人民の軍隊の規律、何ひとつとってみても、その具体的な事実の前で、私はハジキ飛ばされてしまうのである。いまの私の思想と行動力では、現象的なことでさえ理解するのがやっとであった。肌身はなさず持っている、自分をささえてきた「実践論」、「矛盾論」、「湖南省農民運動視察報告」、の小冊子をもって、広州の講習所を見、延安の洞穴のなか、毛主席が論文を書いた机の前に立つと、ただ涙がボロボロと落ちるのである。

本の上の知識と革命闘争を勝利したという数々の事実に、私はほんろうされ、主体をうしななって感情のなかに押し流される自分であったけれども、いまの自分にはどうしようもなかった。

歴史的条件のちがいはあれ、中国には私の祖父や父や母と境遇を同じくするものが沢山いた。日本帝国主義に両親が殺され、地主に買いとられ馬小屋の銅馬桶のなかで育ったという女性、そうしていまは毛主席と中国共産党に救われ、人民公社に働いている。地主のもとで私の母は一年働いて40円、父は60円であった。12才、13才のときに奉公にくちべらしとして働かされ、間引されなかったのが不思議な位の生れと育ちである。祖父は学校にゆかず、父も母も六年生までだ。その生活のなかにある貧乏と苦痛は、中国ではさらにひどいかたちで沢山あった。

そんな話を過去の体験として、中国の人々は語り話しつづけてくれるのだが、それは我が身につつまされるような切実なひびきと痛みとなって私の身体を、うずきかけめぐるのであった。

そうして、同じ階級が持つ喜びの共通性に自分の気持はほぐれ、生れてはじめてやすらぎを覚え、感情もなめらかになり、のびのびとした。解放された中国の人々の心の温さは、はじめて自分の良

心を自由にしてくれたのであった。

この訪中で、私の考え方を決定的にしたのは上海でめぐりあった中国の女性のつぎのような言葉であった。

「私は日本帝国主義に両親を殺され、中国共産党に救われ解放されました。アメリカ帝国主義が日本を基地として朝鮮とわが祖国を侵略しようとしたとき、私は毛主席の指示にしたがって義勇軍に参加し、祖国防衛と朝鮮の同胞のためアメリカ帝国主義と戦いぬきこれを打ち破りました。いまアメリカはアジアのベトナム化政策をすすめ、再びベトナムで侵略戦争をおこしました。日本人民のそれに対する闘争に中国人民は大いに励げられました。いま世界平和のため皆さんはどう戦っているでしょうか具体的に教えて下さい。」戦地での体験を通じての発言は、代表団を圧倒し、私を含めてしばし沈黙がつづいた。

私が生きてきた、侵略と抑圧に対するたたかいの行動の歴史のなかに、「私はこのようにやっています」という質の高い言葉は、もっていなかった。

私は中国の人々の前で、そのとき、深く恥じあった。両国人民の共通の利益の追求ということで主体は育ててきたつもりであったが、侵略した国と、侵略された国のちがいを、殺したものと殺された者のちがいを、この両者の質のちがいをうめるものは、徹底して階級闘争をやりつづけることであり、生死をかけて戦争に反対することである。私にこの行動がなかったから恥じたのである。日本がくりかえしおこなってきた中国侵略の歴史、日本の大人がくりかえしてきたあやまちを自分も再びくりかえしていると思ったからである。またこの闘争なくしておのれを含めた階級の生活の防衛もありえないのだし、中国革命の真実をつかみとることはできない。闘争を学ぶということは、中国革命を学ぶということは、この観点なくして、素通りして学ぶことは許されない。そんな安易な知

識や受け止め方は、闘争と個人の一生にとっても有害であると思った。

私は中国のこの女性の言葉体験に励げまされ、ベトナム侵略基地反対、日本軍国主義反対の闘争として、八街、富里の飛行場建設反対に参加することを中国で選択したのである。八街、富里三里塚の農民と共に生きることがこうしてはじまった。それからはきびしい権力との闘争の日々が9年の歳月を私のからだのなかに積みかさねていった。

農業破壊と日本の農民の死

私の家には昼間は人が住んでいない。このような状態は5年も前からつづいている。両親が出稼の賃労働にでているからである。このような農村農民の現象は私の家にかぎったことではなく、私の部落もそうだし、日本中の農村、農民がそのような状態におかれている。部落を挙げての離村も珍しくはない。私の両親や部落の農民が、日本の農民が誰ひとりとして好きこのんで自分からの意志で農業をすて村を放棄していったのではない。

歴代の自民党政府が独占資本擁護・海外膨脹政策をとり、農業の国内自給政策を放棄しアメリカや東南アジアから大量の食糧・農産物の輸入政策をとり農民を圧迫しつづけているからである。

私も、部落の農民も政府から農業近代化資金を借り受け・水田に胡瓜を、畑にブドウを、養豚・養鶏・黒牛の肥育等、農業経営に努力したのであるが、いずれも借金農業は赤字が累積した。その借金返済のため出稼等の農外賃金をとらなければならなくなったのである。

私の部落における田植の手間賃は1日当り3,000円であった。田植の経費は昼の食事10時と3時の茶代、晩酌づきの夕食で4,000円はかかる。

だから、「田植の手間賃が高くてやれきれない」と1部の上層農に田植機械が入った。一方下層農は、「田植機械で植えてもらえば、田植が早く終

り、それだけ稼げる」と出稼にゆく、水稻もこんな調子で刈り取ってもらっている。「畑は水田とちがって手間がかかってやれきれない」と、山合にある段々畑は雑草がのびほうだいになり、松の苗や杉の苗が植えられている。

ここ数年部落のなかで、中学や高校を出た青年が農業についたという話しは聞いたことがない。農業発展にとって必要な優秀な人的資源は都市工業に吸収され、一部の農民は保険やミシンの外交員、馬喰等に職種をかえていった。こうして部落共同体は崩壊していった。

政府の反農民的政策はようしゃなく我々農民にふりかかってきた。食糧制度の廃止、米の減反・買付制限・自由米の強行実施等々と米俵は麻袋へ、さらに紙袋へ、藁縄はビニールテープへと変化し、農民の生活は益々資本主義経済のなかに組みこまれていった。

部落の農民内部のなかでも階級分化が一層深化し、受請耕作に出す農民もでてきて、反当3俵の高率耕作料を出す農民が現われてきた。萌芽の状態ではあるが、農民が農民を搾取する経済関係さえ生れてきた。

出稼10年の経験のある男たちは、その経験をいかし、土木工事の重機械を賃借し、親方につかわれるばかりでは損だと土建・土木の下請をグループごとにはじめた。藁加工をとりあげられた、おんなたちは、1カ月2〜3,000円の手内職から土方へ、さらに東洋電気やカンズメ工場の労働者になってしまった。逆に会社から休暇をもらって農繁期に自分の田畑で働くようになった。

出稼のなかの賃金のピンハネ、親方、組頭の給料のもちにげ、不払、遅配は日常的に発生し、この作業中に重傷者と死者が出るに至っている。1人の農民は通勤中に交通事故にあい、2人の農民は東京で鉄板の下敷になって即死した。私が千葉の出稼で経験した長野の青年の死は私の部落へ、そうして私の家にもふりかかってきた。

川鉄の鉄鉋船で荷上作業中に、父は腰の骨と足首の骨を打ち砕く重傷を受けたのである。戸板で病院にかつぎこまれた父は意識不明の日が2日もつづいた。2年間の病床生活からはいあがったときには父は片輪になり足をひきずって歩かねばならなかった。この65才になる父は朝5時から再び不自由なからだで出稼にいつている。

農業の前途を悲観・絶望した部落の青年はビニールハウスのなかで首をくくって死に、もう1人の青年は私の家の前の墓地で木の枝に首をくくって自殺した。農業の後継者がなくて自殺した父親もいる。

米の減反を苦に、政府のやり方に抗議して自殺した農民は東北地方だけでも20名にのぼっている。日本中で農民が死ぬような目にあい、死んでいつているのである。

そうして私は、三里塚闘争のなかで、青年行動隊の三ノ宮文雄君の死にあわなければならなかった。駒井野の条件派の農民が鎌で自分の首を切って死のうとした。三里塚では自分の家のへりに首をくくって農民が自殺し、岩山では農民が服毒し自殺をはかった。

この日本農業の破壊と日本の農民の死をいかに理解するか、“日本軍国主義復活強化のもとでの農業破壊と農民の死”，この抽象的言葉を唱えているだけでは問題の解決にはならない。

我々は自分の行動の問題として、実践の問題として受けとめねばならない。

理解する、理解したということは実践することであり、真理の基準は社会的実践だけであるからである。

日本軍国主義に反対する農民闘争

日本軍国主義復活強化の政策は、かならず農業を破壊し、農民の圧迫と収奪を強化するなかでおこなわれてきた。そのときには、かならず反中国

の政策が露骨にやられたときでもあった。日本の農地改革も反中国のアメリカの占領政策として実施された。アメリカ帝国主義の朝鮮侵略・中国への侵略の野望と日本の加担、日米安保条約の締結と日本の再軍備は、MSA協定による余剰農産物（麦）の買入と兵器の援助のなかでおこなわれた。私の家の田畑から、部落の二毛作田にこがね色に実っていた麦が姿を消し、日本の農民が、麦をつくれなくなったのもこれが理由であった。

千葉県は北海道、九州につづくさつまいもの主産地であったが全滅した。貿易の自由化にともなって、アメリカのトウモロコシ澱粉の輸入と、佐藤とグエン・カオキが約束した、南ベトナムからのタピオカ澱粉の輸入があったからである。

この政治背景には、60年の安保国会、別名農業基本法国会があった。この強行採決は日本のベトナム侵略への積極的加担・日韓条約にみられるような海外への資本の輸出と市場のかくとくがあった。

農民の六割首切りの、農業基本法は理念立法、農業に対する政策の理念を示したものだと言われた。政策的には全国3,000のパイロット地区を設定して構造改善事業を実施することであった。

日本でいちばん最初に成田市豊住の農民がモルモットとして権力に選ばれ生体実験をされることとなった。400戸の農家のうち250戸が農地をとりあげられ村を追いだされるというひどい計画であった。

豊住の農民は構造改善反対同盟を組織し、これに反対し計画を大幅に縮小する闘争をおこなった。

朝鮮戦争で資本を拡大し平炉メーカーから高炉メーカーにのしあがってきた川鉄は、千葉に進出してきて、印播沼の水を工業用水へと要求してきた。印播沼周辺の3市11カ町村の農民9,000人は印播沼防衛同盟をつくって農業用水死守、印播沼の干拓・土地改良つづけろと、水資源開発公団法と闘かう全農村の労働者と共闘して集会を開い

た。

アメリカからのトウモロコシ澱粉・南ベトナムからのタピオカ澱粉の輸入に反対し、北総の農民は抗議の自動耕運機デモをくりひろげた。

利根川の水が工業用水にとられるため、年々農業用水が減り、海水が上流40キロまで逆流し、45.166町歩にわたる水田の塩害が発生し、3市2カ町村の農民は塩害対策協議会をつくり集会を開き政府や県にその対策を要求してたちあがった。

そうして、富里・八街に羽田空港の7倍もある飛行場が建設される計画が閣議で内定したのである。

富里・八街・山武・酒々井・芝山の農民は空港反対同盟をつくって、広はんな農民の連合戦線をつくってこれに反対した。

運輸大臣が富里・八街地区をヘリコプターで視察すれば5,000の農民は集合やデモを敢行し、竹やりデモをおこなった。

青年行動隊が自動耕運機デモで県庁を包囲し、むしろ旗、地下足袋で県庁のジウタン!の上を歩きまわり知事に抗議すれば、又、反対同盟も1,500人の抗議団を運輸省や政府の各機関におくった。

農民の闘争に労働者もカンパ・援農・集会への参加と加わってきた。

千葉で労働者と農民の空港反対総決起集会が開かれたとき、2,000の農民は県庁の正面玄関のガラスをたたきわって庁内に乱入し半日も県庁を占拠した。

日本の農民運動は、農地改革以降・陳情や請願行動・経済斗争に終始し、農政活動の範囲のなかにとどまっていた。

しかし、いよいよ一部の代表者による陳情や、国会議員にたのむ予算かくとくや、紹介の行動ではなく、むしろ旗を農民がおったて農民ひとりひとりが地下足袋に身をかため直接抗議行動を展開する斗争が生れてきた。

富里・八街・山武・酒々井・芝山等の農民の空港反対県庁乱入斗争は、その暁の到来をつげる画期的、歴史的な出発であった。

この闘争は私が中国から帰り、富里に住みついて闘争をやるようになってから丁度3年目のできごとであった。

私は農民とともに、千葉県庁のガラスを打破乱入し、県旗と日の丸をたたきおとし、正面玄関にむしろ旗をさげた。

この行動は貧農が長い長い歴史のなかでもちつづけてきた権力への抵抗のくすぶりを爆発させ、解放し、階級闘争の自覚を私に与えたのであった。そうしてこの行動を基本にする闘争・運動こそ、現代の、農民の死を生み荒廃の限りをつくす農業をたてなおすことができるものと確信した。

この農民の行動こそ、中国の侵略の歴史に対する日本人民の反省として私は位置づけなければならないと考える。

この行動のなかから、支配する者と支配されている者、侵略戦争を企てるものと平和を願う者、侵略した国と侵略された国、殺した者と殺された者の立場のちがいのなかにある真の人民の利益のなんたるかを発見することができるからである。

空港建設に反対し県庁に乱入した農民を支配者と新聞は「暴徒」とよんだ。国家権力の政治暴力によって農民の生活を破壊し、土地を収奪する行為は資本主義社会においては正義であるというのである。自分の生活を守るために、ガラスの何枚かを破った農民が暴徒であり反乱者なのである。農民の土地をとりあげるのもひどいけれど県庁のガラスをたたきわるのもゆきすぎだと、我々の仲間のなかから批判もあった。

「むちゃくちゃだ」と「すばらしい」こと、いわゆる「ゆきすぎ」の問題の学習（湖南省農民運動視察報告）をくりかえし、くりかえし私は読んだ。

こうして、私は上海で朝鮮戦争の体験を語って

くれた、中国の女性と会話ができる行動と言葉の質をもつ契機をつかんだのである。

私はさらに、富里、八街から三里塚へと空港反対闘争へ足をのばしていった。

日本の歴史のなかの飛行場の位置づけをみると、いつも侵略の基地であり、侵略戦争の先兵の機能を果し、日本の国の象徴であった。しかも日本の飛行場と航空網は日米軍事体制のなかにしっかりと組みこまれ、その指揮権はアメリカがにぎっていた。しかもそのほこさが、資本の海外膨脹政策のもとで、中国にベトナムに、アジアにむけられていた。

このことは、闘争をかさねるごとにはっきりわかってきた。

三里塚農民の歴史には「天皇の財産たる御料牧場管理のため強制労働」と「農地改革の不徹底と御料牧場の残地と存続」があった。さらに戦争引揚者（満州、朝鮮）と戦争罹災者、沖縄強制疎開者の受難の歴史があった。

そうして、再び日本軍国主義復活のもとでの土地の収奪と、しかも直接侵略にかかわる飛行場の建設がふりかかってきたのである。

三里塚の農民は「日本の農民のためにも土地を手放すな」「ベトナムに飛行機を飛ばすな」、政府の土地収奪に生死をかけて反対をしてきた。

国家権力に対し、子供を含むすべての農民が学生、労働者とともに新しい団結を創造しつつ斗かいぬいてきた。

三里塚で農民が闘争を開始すれば、砂川・北富士・佐世保・東大等で労働者・市民が斗争に立ちあがった。ベトナムではアメリカ帝国主義が敗北し、アメリカ人民の反戦闘争もわきおこるなかで、中国ではプロレタリア文化大革命が勝利した。

毛沢東を中心とする7億中国人民は、ベトナムの偉大な後方であるばかりでなく、三里塚の農民の偉大なる後方でもあった。「人民日報」・北京放送・「北京週報」・「人民中国」等を通じ、くり

かえしくりかえし三里塚農民の斗争を中国人民は断乎支持すると表明した。

東方紅雑技団、卓球選手団等と三里塚農民の交流、中国展と東京事務所記者との座談会と、中国人民と三里塚農民の戦闘的友情は日常の斗争のなかで発展していった。

この行動は、私のもっている農民の閉鎖的世界を解放し、本の知識のなかにあったプロレタリア国際主義の観念を打破し現実のものとし、それを身につける契機を与えていった。

侵略戦争と人民の餓え

私の部落のように、三里塚のように、日本の耕地は荒れるにまかせ資本に奪われつつある。

この日本の現実とは逆に、中国ではすさまじい勢いで、天と地が耕されている。

中国の農民は「中国を改造する」「革命のため生産を促す」とはげしい生産意欲をだしていた。中国の労働者と工場は断乎たる決意をもって農業を支援していた。

中国共産党と人民政府は「農業を基礎とし、工業を導き手とする」方針のもとに精魂をかたむけ、情熱をかけ、細かい配慮をし、農民愛護の政策を農民の自発性と創意のもとで実施していた。

あの広大な中国の土地・田畑に雑草がほとんどみあたらないのである。山にもない。雑草は実をつけないときに堆肥として刈りとってしまうからである。

中国の岩山には子供・農民・労働者・解放軍が蟻のごとくむらがって植林していた。農業用水の水源地を確保し灌漑と水害から田畑の作物を守るためである。

農業用水路は網の目のように縦横に走り、肥料として徹底的に泥がさらわれ、用水池は養魚池となって農民のタンパク質の供給源となっていた。鉄道線路の土手にまで作物がつくられているとこ

ろもあった。

このように中国全土がスキマなく徹底的に集団労働をつぎこまれて耕されているのである。

私はここに国の社会体制のちがいと、農民の二つの運命をはっきり自覚したのである。

この自覚は、現実の日本農業・三里塚斗争への農民としての深い重い責任を背負わせるのであった。

私は「土は真珠より尊し」という、岩山と石ころはあっても土がない沙石峪人民公社を訪問した。

1本のリンゴの苗を植えるのに7本のツルハシをおったという。1ムーの畑を造成するのに、青年はキャンプを張り、カガリ火を焚き、5Kmの山道をモッコで土を運搬したという。

この青年達を変える「万里千担1畝之地」の石碑の文字をどう理解すればよいのだろうか。

生れてきてこの方、自分の農業労働の歴史をさぐってみても、労働で節くれだった手足をみつめてその実感を呼びさまそうとしてもこんなにも真剣に農業生産にたずさわった経験がない。

「隣りの貧乏カモの味」「隣に倉が建てば腹が立つ」の我田引水の生産意欲と富里・八街・三里塚の9年にわたる農民との生活のなかでの同情的な援農活動等の思想と行動しかもっていない私には、とても理解する力がなかった。

私がこの碑文の前に立ってうろたえているとき、岩山の頂上まで畑をつくるのだといって、岩山をくりぬいて地下道を中国の農民はつくっていた。岩山のむこう側から地下道を通して土を運搬してきて岩山のテッペンに畑をつくるのだという。

土が真珠より尊ければ水もまた「油よりも尊し」という現実がそこにあった。岩山の中腹をくりぬいて貯水池を農民はツルハシと一輪車で作っていた。水を山のむこうから引いてきて貯水池にたくわれるという、灌漑施設と各農家に水道を引くというのである。

赤い岩山に畑をつくりまた木を植えるのだとい

う。「水分のない岩山に木は育たない」と主張するものと、「木を育て水源地を確保し農産物を守る」と言うものとのほげしい生産のなかの階級斗争があった。

岩山に穴を掘り、土は遠いところから運搬してきて、それに水をかけては土を入れ、土を入れては水をかける実験がくりかえされていった。そうして岩山に1本の木は育ったのである。まず民兵が植林にたちあがり、つづいて青年がたちあがり、婦人もそのあとにつづいた。そうして生産隊全体の作業となった。

雄大な岩山の中腹に民兵林・青年林・婦人林が小さく青く輝いた。

沙石峪の人民公社に干ばつがやってきたときには、夏の期間中総出で水をかたで運び、1本の作物、1本の畝に水をかけつづけたという。延べ数万キロの道程に達したという。普通の年より自然災害の年のほうが作物がよくみのり収穫があがったという。

この中国の農民の自発性と農業生産に対する決意と意欲と創意はいったいどこからくるのであろうか。

生産隊書記の張貴須さんは自分の体験をつぎのようにかたてくれた。

「私たちここに住む農民は、日本帝国主義・封建地主・軍閥等のために、家族は殺され、身よりとてなく、土地は奪れ、家は破壊され住むところもなく、全国を乞食として流れ歩いていました。そうして狼しか住んでいなかったこの岩山に住みつき野草を常食として生きのびてきました。1滴水を飲むのに5 Kmも遠いところにゆかなければなりませんでした。解放前はこの村は中国の地図にはありませんでした。」と。この中国農民のすさまじい、きびしい生産意欲は日本帝国主義の侵略と人民の餓えという歴史の反省からくるのではないかと考えた。

私のからだのなかにも、日本の農民のなかにも、

貧乏の苦しみと、餓えの苦しみが、それにふれると痛くてせつなくて涙がこぼれるものをもっているのに、その日本の農民が優秀な人質資源として狩り出されていって、そうして中国の農民を殺害し、この想像に絶する飢餓の世界にたたきこんでしまったとは。

沙石峪人民公社で初めて民泊したのである。その布団の限りない温かさのなかで、私は一晩中涙を流して泣いた。

そうしてこの悲劇と敢然とたたかう自分をいかにつくるのか考えるのであった。

張貴須さんはさらに言葉をつづけた。

土地を集団化するための階級闘争・思想闘争と人民公社の発展・畑の広さと生産高を具体的に数字で私達に教えてくれた。

毛主席と中国共産党はこのように自分たちを幸福にしてくれたとつけくわえた。

そうして、現在、戦争に備え自然災害に備え、食糧は3年分貯蔵してあるが、「革命のため生産を促し」「中国を改造する」決意をもって生産にとりくんでいるのですが、私の事業は満足すべきものではありません。と言葉をむすんだ。

中国の農民の生産意欲は侵略戦争と人民の餓えの歴史に対する反省ばかりでなく、自分たちだけ満腹感を覚えればよいという受動的なものでなく、侵略戦争を絶対阻止し、生産を守り発展させる、祖国の社会主義建設と世界革命のため、帝国主義の侵略と闘かう世界の人民に対し食糧を含むあらゆる援助をおしまないという、その為の生産意欲であった。

自民党の農政調査会は「現在日本の経済活動に使える土地の75%が農民の手の中にある。これをいかに収奪して経済活動にもちいるか考えなければこれ以上の発展はみこめない。経済活動のガンは土地問題である」と発言している。「新全総」にもとづく政策の基本姿勢はまさにこのようなものであった。

いま、農業第3次産業化論なるものが、政府によって考えられ、観光農業、レジャー農業をつくれという。農業生産が国民の遊びにの余暇のたぐいのなかに附属物として位置づけられる恐るべき考えが出現した。

佐藤にかわって総理になった田中は日本列島改造論なるものを発表し「新全総」を手なおしし、田中派政策ブレーンをかきあつめて政策立案実行を急いでいる。「日本列島改造論」を農業施策の観点からみると「農地から道路、住宅、工業用地の転用を差引き、その残地を農地永久団地として財政を援助し、集中的な土地基盤整備をやる」というのである。そのため農地法を改正し公共用地の取得をたやすくし、企業や公団に土地収用権を与えるという構想である。

日本のなかで三里塚よりも大規模に農民の土地を収奪する体制づくりが着々と進行している。

中国の周恩来総理は私たちと日本人民にたいしてこのように農業問題を指摘している。「土地問題があり」「土地の合併と集中が速い速度で進み」「土地は銀行資本に握られ」「農民が負担を負って土地から離れていっている」と。食糧問題については「人民の主食になるものまで輸入に頼るのは奇形的であり」「偉大な日本人民がこの食糧事情で他人から支配される結果になるでしょう」と警告している。

さらに、「日本の経済は奇形的なかたちで外国に頼り、自力更生ではない独占資本が発達し、中小企業が破産し、都市人口も増え、臨時工も増え、農村労働力は減少し、婦人・老人に頼らねばならない状態で労働力は農村から離れていっています。このようなことから日本は対外拡張をもってゆかざるをえないし、戦争の道を歩まざるしかない」と言っている。

日本の経済と農村のなかに「対外拡張」と「戦争への道」を受け入れている構造があること指摘したことは極めて重要なことであると考える。

天皇・地主制のもとでの農民の半失業と安い労働力の供給源、最も優秀な帝国主義軍隊の人的資源あったことをもう1度反省する必要がある、農業破壊の棄民政策のなかでの、ぼう大な貧困層の出現と流動について、ファシズムを育て受け入れる要素があるかどうか我々は吟味しなくてはならない。

日本政府が倉庫に保管している米の量は、1年と14日分しかない。日本人民が1年食べて14日分しかあまらない量しかないのである。日本の農業の国内自給率は50%前後に下がってしまった。自分のいぶくろのなかは、半分は外国の食糧というわけである。

3年間分の食糧を貯えてある中国からみれば日本の食糧事情は悪いのであり、農業破壊政策のなかで、本質的な飢餓がおとずれていることを我々は知らなすぎるのである。

自分の国の人民のいぶくろが外国の食糧によって、しかも侵略加担の代償として満されていることに我々は無関心すぎるのではないか。外国の食糧植民地主義とそれを受け入れる政策を我々農民は許してはならない。

自分の目の前に土地があるから畑や田になるのではない。耕地にするのには20年も50年もの歳月と労働の投下が必要なのである。そうすることによって、初めて農民の納得する農産物がとれるのである。

自分に空腹がおとずれるときには、日本の田畑はなくなっており、支配層は戦争という手段をもってかならず外国から食糧や資源をうばいはじめているからである。

これは歴史の教訓である。私は侵略戦争と人民の飢餓に対して、三里塚闘争を農民として位置づける。だから三里塚の闘争のなかに生きるのである。

農民が工業に参加し、 労働者が農業に参加する

中国の田畑には水利と灌漑施設が整備され石炭を利用しての野菜の促成栽培がおこなわれていた。育成の技術そのものは高くはないが、ビニールの生産資材をつかうほど農業と工業が発展していた。

王国権氏主催の夕食会で北京の四季青人民公社の同席した農民に「私のところで栽培した胡瓜です」とすすめられたときには、中国の発展に驚いた。

中国で土地改革が実施されたとき、一部の農民はこれが自分の土地になったことを信用することができず生産意欲をおこすのに大変苦労したはなしを聞いたことがあった。また、解放された田や畑の大地に自分の顔をこすりつけて、もうなにもいらないと泣いて喜んだ農民を私は知っているからである。

日本資本主義は農業を破壊しつつ重工業を発展させているが、中国では工業を発展させることが農業発展に欠くことのできない要素である。人民公社の耕地は大型の機械、肥料、農業資材を首をながくしてまちのぞんでいいるからである。

私が行く先々の工場の労働者は「農村、農民の革命的な生産意欲と発展に比べれば、工業はそれにおいていません。我々は奮闘努力して農業と農民を支援しなければなりません」と決意を表明した。

上海の工業展覧会場には、重化学工業、電子工業の製品と部品が展示してあった。工業水準とその技術の高さに驚かされた。

その機械のなかに農村に必要な手動式の強力な発電機や組立用の高級の手術用ベッド・田や池の水もすぐ蒸留水になる器具等も農村への深い配慮のもとにつくられていた。

発動機、ハンドトラクター、トラック等は実用むきに丈夫に製作されていた。

都市工業のなかでの農村支援の気迫がうかがえるのは心強かった。

しかし、人民公社といちばん密接につながっている地方工業の発展はどうであったであろうか。

私は河北省遵化県の県営地方工場を見学した。

中国では修正主義路線のもとで、「地方工業は合理的でない」と修正主義者に賛同する者に破壊されつくされてしまったという。私が参観した農機具工場も何百人もいた労働者が70～80人となり、工場閉鎖がおこなわれた。参観する工場は少なくとも、それに類似した打撃を受けていた。

人民公社の農民は、数少なくなった地方工場の労働者と協力して修正主義の手から工場を奪還する階級闘争を展開し工場を自分たちのものにした。中国ではなぜこのように地方工場が必要なのであろうか。

中国は領土が広い、交通機関が発達していない、だから農民がトラクターやトラック・農機具の部品を都市工場までとりにいくのでは、生産がおくれ不合理だとも説明してくれた。

中国の地方工場では銑鉄の製造から部品まで自分の工場で作っている。人民公社の経営の工場でもそうである。銑鉄の製造から部品へと一つの工場で一貫してつくっているのである。この手工業的、原始的形態の本質はいったい何であろうか。

私は地方工場の労働者に、最近製造した農機具で、農民がいちばん喜んだものは何ですか、と尋ねた。そうしたら田植機械だという。

ではその田植機械の製造過程でどのように農民の協力をえましたかと訪ねた。そうしたら設計に農民が参加しているのである。そうして労働者と農民の学習討論がさまざまなかたちでおこなわれ、労働者と農民がくりかえし、くりかえし実験して田植機械をつくったという。また、農繁期には労働者は農機具修理班を派遣し、人民公社の工場の農民に対しても技術の援助を日常的にしていると

いうことであった。

農民が工業に参加し、労働者が農業に参加するということは、中国の社会主義社会のなかにおける労農同盟の発展したかたちではないだろうか。

この意味において、地方工業は、労農同盟を保証する強固なプロレタリアの陣地であったと考える。修正主義者、修正主義路線による地方工業の破壊は中国の労働者農民の同盟を破壊することであり、プロ独裁の否定ではなかったのか。労働者農民による地方工業の再建こそ農業を発展させる決定的要素であり、プロ独裁の強化にほかならないとプロレタリア文化大革命をこの面から位置づけるのは見当がはずれているのであろうか？

地方工場があれば農民は機械の部品をとりよせるのに便利だという経済活動や生産活動の範疇をはるかに越えて、人民の権力の強化がそこにあったのである。

中国の雄大な抗日統一戦線の歴史と、社会主義建設のなかにおける労働者農民の統一戦線の発展は、日本の軍国主義に反対する日本人民を結集してゆく上で重要な教訓を与えている。

学習と実践

中国人民の日常活動のなかでの学習と実践、思想改造は、最も中心的課題として実践されていた。

中国ではいま8億匹の豚を飼育する計画を実行している。だから飼料の問題は極めて重大な問題である。そこで中国側は人民解放軍の兵士が考案したという飼料を紹介してくれた。

それは農産物の幹を早し、それを砕いて粉末にする。さらに酵母菌を入れて醗酵させる。農産物からは何ひとつ無駄はなくなりみんな役立たせることができ豚の飼料問題は解決したという。

ではこの飼料はどのような経過のなかでつくられたのであろうか。あこがれの解放軍に入隊することができた1人の若い兵士は豚の飼育係になっ

た。しかし不満をもっていた。

そこで人民の軍隊の本質は何かということについて同志の援助を受けた。かれはそこで奮起してこの飼料を考案した。毛沢東思想（哲学）の学習と実践の結果であるという。

「三里塚の皆さんもアメリカからの輸入飼料や独占の高い飼料で損をしていないで、自力更生で飼料問題を解決すれば、それも立派なアメリカ帝国主義と日本の独占に対する斗争です」と生産のなかにおける学習と実践、政治優先の思想の観点を教えてくれた。

鍼麻酔を参観したとき頭の急所のところに麻酔のための鍼を打たれるのをみると不安だというのが我々の卒直な感想だった。不安や緊張をいदैては鍼はツボにうまく入らないということであった。この不安と緊張をどうとりのぞくかという問題になった。そうしたら医務工作員は「自分の身体に何千の鍼を打って実験し」「人民のからだには1本の誤った鍼を打ってはならない」人民の為には死を恐れなくて自分の身体を実験台とするということだった。

患者側は早く治療し立派な革命の後継者となり、中国の社会主義建設に参加し、人民のために尽したい、その目標のもとに死をも恐れなくて治療に耐える、この両者のきびしい学習と実践と思想斗争が展開され思想と行動の一致性を両者がかちとったとき不安はとりのぞかれ緊張はほぐれ両者は同志となるということである。

中国では、あらゆる分野でこのように学習と実践を通じての思想斗争が展開されているのである。

差別の意識、侵略の意識、日本軍国主義の政策を容認する意識を根本から変革する学習活動と実践斗争を我々は展開しなければならない。

革命の党と新しい指導者の発見

私は日本の農民が悲観と絶望のなかでみずから

命を絶っている現実には直面している。また、農民の生死をかけ空港反対斗争に9年の歳月をかけてきた。

この農民の死の問題を解決し、三里塚斗争と同質の農民斗争をどう全国的に発展させるか、日本の農民にあたえられた課題は重く大きい。

私は延安で大長征に参加、大雪山を越えた労農赤軍の兵士と、南泥湾の大生産斗争に参加した古参戦士、それに抗日遊撃隊の隊長に、当時の経験をかたってもらった。

生か飢死か、革命の遂行か、放棄か、この絶望と思われる条件を克服して革命を勝利に導いていったそこには、毛沢東の英明な理論と指導、中国共産党の偉大な姿があった。

中国の大革命と社会主義建設について、私はそれを正しく評価する能力を、もちあわせてはいないのだが、この延安での体験は日本における革命党の建設という最も基本的な課題を私に与えるのであった。

日本の農民の死と三里塚斗争の限りのない発展のなかで、修正主義の党＝日本共産党は、絶えず反対同盟に敵対し、農民、労働者、学生を中傷、非謗し、組織の分裂策動をおこない、権力に三里塚斗争をうりわたしてきた。

日本社会党は三里塚斗争を自己の野心を満足させるための選挙の1票とみなし議会主義のなかに浮身をやつしてきた。

この意味からいって政党は三里塚斗争の加害者の立場にたっていた。

共産党は平和塔移転と冷暖房防音づきの道場の建築ということで権力との話し合いがつき、社会党は自から提案した1坪共有地を放棄した。京成電鉄の工事のなかにある共有地を元社会党千葉県本部委員長がまっさきに放棄承認の印をついているのを見てわかる。

延安の人民、中国人民のなかにみる、毛沢東・中共幹部の信頼は絶対的なものであり、その大衆

の日常性のなかにみる指導と工作态度にはあらためておどろかされる。

外国の大学を出て、27歳頃のときには、中国共産党の指導者として活躍しつづけてきた周恩来総理、一方流浪の農民、乞食であった張貴須氏は、大寨の陳栄貴とともに、7億中国人民の模範である。

この二人の偉大なる中国人民の指導者は、出身階級はまるっきり異にするのだが、この両者のなかにはげしく流れる階級感情になんの違和感も感じることができなかった。

農民的な言葉で表現すれば「革命というおなじカマのめしを食った仲」と、肌で感じとるなかに違和感がないのである。

三里塚の農民は「一国の総理が三里塚斗争の基本をよく理解していて、今後の斗争についても細かく参考意見をのべてくれた。我々の気持と斗争の姿勢をよくつかんでいて、まさしく革命斗争のなかで鍛えぬかれた指導者」であると言っている。

三里塚の農民や私が周総理の語る一つ一つの言葉の意味を深く解することができたからそうしているのではない。その言葉の底に流れる闘かう者の階級感情のふれあいが痛いほどわかるのである。周総理の左手の不自由さが大長征のときのけががもとでそうなったと聞いたとき、三里塚の農民は何千の労働者・学生が権力の弾圧のなかで血みどろになっていくのを見つめると同じ悲痛の腫と視線を周総理の左手にそそぐのである。

三里塚の農民は共産党の野坂参三にあってことがある、あるいは社会党の歴代の委員長と。しかしこの階級感情が肌にピッタリするほどの感じはなかった。そればかりか農民は会うたびに条件斗争をすすめられて絶望の感情をいだいて帰ってきた。自分たちとちがう世界に住んでいる者だと。

中国で新しい革命の指導者政治家を発見したことは大きな勇気であった。

私は延安で革命委員会の副主任から感想を求め

られたことがあった。

私は、「プロレタリア文化大革命の勝利によって、中国全土が発展したかたちの延安になったのではないのでしょうか」と、これは素直な私の印象である。中国の一つの人民公社、一つの工場、一つの学校、一つの家庭は、すべて大小の延安になったと感じた。プロ文革のなかで人民は鍛えぬかれ、あらゆる分野、戦線に労農赤軍が再現したと思った。

これを創造する過程における、社会主義社会のなかにおける階級闘争のすさまじさは、資本主義社会の階級闘争よりはげしいものがあった。自分たちの権力をうちたて維持することがどんなに大変な困難と努力を必要とするものか身にしました。

毛沢東主席は世界の動向について「侵略戦争の危機は依然として存在している」が「当面の世界の主な傾向は革命である」と英明な論断を下した。そうして「国家は独立を求め民族は解放を求めている」と指摘した。

この世界歴史の大転換をになう主体的条件づくりとして中国の革命（プロ文革）があったのではないかと思う。

中国共産党とその指導者、人民は、再び決意もあらたに苦難と栄光の第二の長征（世界革命）の道を歩みだしたのではないか。

その歴史的第一歩のなかで、「三里塚人民の斗

争を断呼支持する」と表明しているのだと私は理解する。世界歴史の大転換の時代に生きる日本の農民の一人としてこの決意のそこ知れぬ、歴史的深さを私はかならず自分のものにしなければならぬ。

私の目の前に、日本軍国主義復活や、日本農業の破壊と農民の死や三里塚斗争の困難等々がおおきくたちふさがっている。しかし、三里塚斗争をうわまわる斗争の萌芽が全国中に現れて、かつてないほど日本人民の斗争は高まっている。

この自分の目の前にある困難と光明をいかに毛主席の「論断」のなかに行動の問題として位置づけるか考えながら毛主席のつぎの言葉をかみしめている。

「わたしは兄弟3人でしたが、そのうち2人は国民党に殺害されました。わたしの妻も国民党に殺害されました。わたしの妹も国民党に殺害されました。甥も国民党に殺害されました。息子は朝鮮戦争でアメリカ帝国主義の砲弾で死にました。私の家庭はほとんど消滅されましたが、わたしは消滅されませんでした。残ったのは私だけです。中国の家庭には、蒋介石によって消滅されたものが数えきれないほどいます。一つの家がぜんぶ消滅されたところもあります。ですからあなたは悲観することはありません。前途は明るいです。」

お 知 ら せ

研究会々費が10月より、これまでの2,000円から2,500円になります。なお継続の方は10月中に限り2,000円としますので、何年分かの前納をおすすめします。

1972年9月1日

中国研究所